

メアリ・シェリーの短編小説 「現代イタリアの花嫁」の翻訳

池 田 景 子

はじめに

メアリ・シェリー (Mary Shelley) は処女作『フランケンシュタイン (Frankenstein)』(1818年)以降、6作の中編および長編小説に加え、旅行記、ギリシア神話を題材にした詩劇、偉人伝、そして24作にも上る短編物語や記事を執筆している。晩年は亡き夫のパーシー・ビュッシ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) の作品編纂にも携わっていた。しかしながら。このように多岐のジャンルに渡る創作活動であったにも拘わらず、メアリの短編小説は看過されてきた印象は否めない。本稿ではメアリ・シェリーの短編小説「現代イタリアの花嫁 (The Bride of Modern Italy)」について簡単に紹介し、テキストの翻訳をし、その物語を紹介したい。

1. テキストについて

本作品中に登場するクロリンダ (Clorinda) はピサの知事ニコロ・ヴィヴィアーニ (Niccolo Viviani) の娘、テリーサ・エミリア・ヴィヴィアーニ (Teresa Emilia Viviani [1801-36]) をモデルにしたものである。1820年シェリー夫妻及びメアリの異母姉クレア・クレアモント (Claire Clairmont) はサン・ジュリアーノの温泉地 (the baths of San Giuliano) からピサへ居を移す。サン・ジュ

リアーノ (San Guiliano) はピサから4マイル離れたところにあり、シェリー夫妻は夏をここで過ごしていたのだが、その年はセルチオ川氾濫による水害に遭ったため、ピサへの転居を余儀なくされた。

ピサに移ると、「数人の親しい友人らとの交流 (an intercourse with several intimate friends)」が始まる (“Notes on Poems Written in 1820” 318)。その輪の中にこのエミリアがいたのである。エミリアは1820年11月にパッチアーニ教授 (Professor Pacchiani) を介してシェリー・サークルに紹介された。パッチアーニ教授はエミリアの家庭教師だった。その後12月3日、メアリは友人のリー・ハント (Leigh Hunt) 宛の書簡では、エミリアのことを「19歳のうら若い女性で、フィレンツェの高貴な方の娘であり、美しく素晴らしい才能を持っていて、イタリアの黄金期の文豪たちに匹敵する優美さと繊細さでイタリア語を書く (She is a young girl, nineteen years old – the daughter of a Florentine nobleman, beautiful – of great genius – who writes Italian with an elegance and delicacy to equal the best authors of the best Italian age.)」とほめている (MLS, 1.165)。

しかし、彼女は不幸な境遇にあった。「彼女の母親はひどい女性で、彼女の才能と美しさに嫉妬して修道院に閉じ込めてしまった (Her mother is a terrible woman: and being jealous of the talents and the beauty of her daughter, she keeps her locked in a convent...)」のである (MLS, 1.165)。そこは聖アンナ校と呼ばれる修道院であった。当初、シェリー夫妻やメアリの異母姉クレア・クレアモント (Claire Clairmont) はエミリアに同情的であった。さらに、メアリの夫 P. B. シェリー (P. B. Shelley) はエミリアに魅了され、詩「エプサイキディオン (Epischychidion)」(1821年) で彼女のことをプラトンの愛の対象として賛美している。

ところが1821年5月までに、メアリとクレアはこのエミリアに対して幻滅を覚えるようになる。1821年9月8日にエミリアがルイーギ・ビオンディ (Luigi Biondi) と結婚すると、1822年3月7日マリアンヌ・ハント宛の書簡

でメアリはエミリアとの関係に終止符を打ったことを「伝承童謡 (a nursery rhyme)」で皮肉って伝えている (MLS, 1. 223)。

クランボーン通りを歩いていると
そこは汚いけれど
綺麗な娘さんに出会い、
その娘は私にやさしくしてくれた。
それでケーキをやり、ワインをやった。
砂糖菓子もあげた。
なのに、ああ！小生意気な！
あの娘はブランデーをねだってきたの。(MLS, 1. 223)

その後、メアリは1823年10月2日から5日、リー・ハント宛の書簡で、今「ロンドン・マガジン (London Magazine)」に寄稿する記事を執筆中であり、その次は「小説 (a Novel)」に取り掛かる予定だといった旨を書き記している。その作品は1824年4月に短編「現代イタリアの花嫁」として「ロンドン・マガジン」9巻に掲載され、匿名での出版となる (MLS, 1. 393; 394n17)。そして、メアリはエミリアをクロリンダとして登場させ、やんわりと諷刺している。メアリやクレアがエミリアに幻滅を覚えるようになっていったのと同様に、やがてパーシーも同じ感情をエミリアに抱くようになっていく。

2. テクストの翻訳

穏やかな冬の朝、ふたりの若い女性、クロリンダとテリーサがローマにある聖S～修道院の菜園をぶらぶらと歩いていた。もし読者が修道院というものを全く知らない、或いはもっと高級なものしか目にしたことがないなら、仮にそういう類の場所のことを耳にしたり、想像したことがあったとしても、一切

忘れていただきたい。そうでないと、聖S〜修道院の庭に入り込むことなど絶対にできないのだ。修道院と聞いてしかと心に描くべきは、横に細長くて背の低い、まとまりのない形をした建物である。また、漆喰は塗られているものの風雨のために変色し、格子のついた窓があるが下の階の窓にはガラスがはまってない、そんな建物である。クロリンドとテリーサがいるのは菜園だが、そこには2、3株のキャベツを除き夏の根株のくずが残っているだけで、辺りに鼻をつくような臭気を放っていた。小道は手入れをされないままではあったが、雑草のはびこるところまではいっていなかった。しかし、割れた陶器のかげらや灰、キャベツの茎やオレンジの皮、骨、そして、出入りの激しい荒れた館がすぐ近くにあるとわかるもの—こんなものがことごとくばら撒かれていた。そんな小道が花壇と交差して、庭全体は高い壁に囲まれていた。

しかしながら、このありふれた光景は、この国でこれまでであったと思われるものとは趣を異にしていた。修道院の壁を背にし、枯れてだらだらと伸びたトケイソウの枝が目についた。ゲラニウムはそこかしこで緋色の花をちりばめた見事な葉を茂らせ、キャベツの合間で霜にやられることなく育っていた。コウスイボクは雨露をしのぐため移し替えられてしまっていたが、オレンジの木は壁に釘で打ち付けられ、黄金の果実がうす暗い葉の間から顔を出していた。壁自体、色合いが豊かなまだら模様になっていて、こんもりと茂って先を尖らせたアロエはその下に植わっていた。

この高い壁の下には、修道院の裏戸とは反対側の隅に囲いをしてある一角があった。そこには尼僧たちが埋葬されていた。裏戸からこの囲いへ向かう小道を、クロリンドとテリーサが歩いていたのである。

「あの人、絶対に来ないわ！」とクロリンドは語気を強めて言った。

「来たら、夕食の鐘が鳴って邪魔をするんじゃないかと心配ね。」とテリーサは言った。

「きっと残酷なだれかに邪魔されるのよ。」とクロリンドはため息をつきながら言葉を継いだ。「だから、聖ジャコモ様にお祈りをして、一番いいお花

と、次の復活祭までもつ長さ1フィートのろうそくをお供えしますって誓っているのよ」。

テリーサは口の端を上げた。「覚えてるわよ。」とテリーサは言った。「クリスマスに同じような誓いを聖フランチェスコ様にもしてたわね。あれはチエコ・マーニのためじゃなかったかしら？あなたは恋人が名前を変えるたびに聖人を変えるから。クロリンダ、本当のところこれまで何人の聖人様があなたのお祈りで祝福を受けたのかしら」。

クロリンダはむっとした様子だったが、その後、つらそうな顔になった。クロリンダの黒い瞳には大きな涙のしずくが溜まっていった。「こんな風に私をなじるなんてテリーサは思いやりのない人ね。今までに私が心を尽くして愛したことなんてあった？一度もなかったわ。嘘じゃないのよ。もし主が、私にジャコモを授けてくださるならー、あら、あの人呼び鈴を鳴らしてるわ！ーテリーサがいじわるするから涙目であの人に会うことになるじゃない」。

ふたりは走って修道院の応接室へと向かい、年配の女性と落ち合った。この女性は半盲で耳もほとんど聞こえなかった。そして、テリーサの兄、ジャコモ・デ・トロメイとの面会にこの女性が付き添うことになっていた。ジャコモが若い女性ふたりの手にキスを済ませた後、会話が始まった。しかし、3人の声は低く、時折フランス語が混じっていたため、3人の見張役にはよく理解できなかった。もっとも見張り役は梳毛糸でできた大判の緑色のショールを編むことに忙しかったのだが。

「それで？」とクロリンダは問いかける風に口を開いた。

「つまり、クロリンダ。僕たちの計画を実行してるんだ。希望はなさそうだけれどね。結婚の申し込み書をしたためてきたよ。もし君が了解してくれるなら、ご両親にお送りしようと思うんだ。ほらこれだよ」。

「その紙は何ですか！」と、見張り役は声を張り上げて言った。

テリーサはその耳元に口を近づけ、大きな声で「最近、アジアで行われたという奇蹟の報告です」。(イタリア人は男女問わず、真実をそれほどぐびいきに

していない。)

「これをごらん下さい、ユースタ」。(ユースタには読めなかった。)

「あとで読んで差し上げますよ」。ユースタは編み物を続けた。

ふたりの女性は互いの顔をちらりと見て、ジャコモ・デ・トロメイがクロリンダ・サヴィニャーニの両親に宛て作成したという結婚の申込書を読み始めた。この文書は2つの条目に分かれていて、初めの項目には「結婚のお申し込み」、次の項目には「それに伴う所見」といった見出しがついていた。しかし、ふたつめの項目は空白のままだった。結婚の申し込みに関する項目は、複数の項目に分かれていて番号が割り振られていた。

この文書が前提とするのは、シエナの高貴な一族がローマのサヴィニャーニ一族と縁組をしたいと望んでおり、その長男とクロリンダに代わって、まずサヴィニャーニの家長らに以下のような考えを伝えることだった。すなわち、青年は容姿に優れ、健やかで、篤学の士であり、非の打ちどころがないほど品行方正である、と。さらに、青年の財産に関する状況が詳細に述べられ、持参金の要求が記されていた。締めくくりの文言は次のようなものであった。もしクロリンダの両親が提案された条件をのんでくれるのであれば、若いふたりを引き合わせ、そこで良い雰囲気になれば、数か月で婚礼の祝いが行われるであろう。

読み終えたクロリンダの目からは涙があふれ、ぼたぼたと紙の上に落ちた。「なぜ泣くんだ？」とジャコモは言った。「僕までつらくなるじゃないか。なぜなんだよ？」

「この提案じゃ、絶対に受け入れてもらえない。だって、結婚持参金に2万クラウンも要求してるじゃない。うちの両親、6千以上は出せないわよ」。

「だけど」とジャコモは答えた。「ここに書いてるのは、親父が絶対に譲らないと思った金額なんだよ。親父は少なくとも2万は要求してくるぞ。仮に君のご両親が応じてくれたとしても、僕は親父の同意を勝ち取らなきゃならない。とはいえ、祈りや涙で親父の心を動かせるなら、僕としてはどちらでもいいと

わないよ」。

夕食の鐘が鳴った。ユースタは立ち上がり、ジャコモが暇乞いをした。夕食！読者は、砂糖菓子を添えた、いかにも修道院らしい、上品な食事として、いったいどのようなものをご想像だろうか？百聞は一見に如かずだが、実際のところ、レンガが隙間なくはめ込まれ奥行きのある床に、モミ板のテーブルと同じくモミ板の長椅子が置かれていた。そして、テーブルはシートで覆われているものの、布はもう白くはなかった。黒塩を入れたレンガ製の塩壺、酸っぱいワインの入った瓶、苦みのあるパンの小さな塊。そこへミネストローネが出されたが、(というのもその日は断食日だったからだ)、それはマカロニと水分と油に、チーズのかかったものだった。次は、油にまみれたいくつかの野菜が出され、メの料理はニンニクで揚げた卵だった。こうして、ローマの最も高貴で美しい女性たちが摂る食事が済んだ。

クロリンダ・サヴィニャーニは確かに美しかった。クロリンダの見事な目鼻立ちから、恋愛体質が心を支配していることがうかがわれた。クロリンダは18歳になったばかりで、この修道院に来て5年が経ち、父親が家柄の良い夫を探し出してくれるのを待つ身だった。しかも、その夫となる男性はわずかな結婚持参金でも同意してくれる者でなければならなかった。そのような待機期間中、クロリンダは何人かの青年に恋愛感情を抱いたため、彼らは色々な口実を見つけては修道院にやって来た。クロリンダは手紙を書いては折り、涙を流し、果ては克服できない困難に膝を屈して、崇拜者を乗り換えてきたが、それでも愛することをやめようとはしなかった。

あなたが気難しいイングランド人でもこのような構図に嫌悪感を持たないでいただきたい。大雑把に言ってしまうと、恐らくこれは我々の舞踏会場で日常的に行われているようなことでしかないのだ。もし度が過ぎていたとしても、一舞踏会場で偽の良心を出し、持って生まれた良心を押しつぶすようなカトリックの体質や、修道院に内在する狡猾さと無慈悲の仕組み、不名誉は隠蔽された過失ではなく表沙汰になった過失に伴うという、イタリアで広く行き渡る

格言—こういった諸事情から、クロリンダがか弱い心と非常に純朴な素質を備えているにも拘わらず、彼女の恋は気まぐれで、振る舞いにも気高さが伴わないことへの言い訳が成り立っているのである。

食事が終わると、二人の友はクロリンダの居室へ退いた。部屋はこじんまりとしていて、高い天井に床はレンガ敷だった。調度品もみすばらしくて、室内はきれいでも整然としているわけでもなかった。小さな寝台のそばに祈祷台があり、そこには十字架と、聖人たちを描いた版画が2、3枚置いてあった。(ちょうど、われわれの国で出回っている子供向けのペニー版画のようなものである。)中でも聖ジャコモが一番真新しく美しい顔をしていらした。これらの版画のそばには、(鳥の飲用容器に似た)グラスが置かれ、そこには聖水が入っていた。しかし、長い間放置されていたのでかなり汚くなっていた。物入れは扉が半開きになっていて、ぼろぼろの書籍や女物の衣類の間には、蠟でできた幼いイエス・キリスト像を入れたガラス容器が掛かっていた。その下には、聖なる寄進のために集めた花々が置いてあったが、光が足りないのか、だらしとしおれていた。窓辺にある木製の飼い葉桶では、モクセイソウ、メボウキ、ヘリオトロープ、伸びすぎた雑草が花を咲かせていた。そして、ひびの入った姿見に鉛のインクスタンド。これがクロリンダの居室であった。

「もう絶望的だわ」。クロリンダは声を上げた。「降りかかった災いに終わりが見えないの—だけど、ひとつだけ道はある—逃避行よ」。

「それじゃ、兄を窮地に追い込むことになるわ」。

「どんな風に?—だってあの人は別の州にいるじゃない」。「それにあなたの名誉はどうなるの?」「こんな牢獄にいて名誉も何もないわ! ああ、天国の新鮮な空気を吸わせて。もうこれ以上、この監獄のような部屋を見なくて済むようにして欲しいのよ。高い壁と修道院生活のすべてにおさらばできるなら、他のことなんてどうでもいいわ」。

「どうやって? 修道院に色んな人たちを招き入れることはできる。だけど、あなた自身が外へ抜け出すとなると、それはまた別の問題でしょう」。

「計画は色々と考えているの。あなたのお兄様の提案がうまく行かなかったら、多分そんな気がするけど、計画をあの人に話すわ」。

そこへ平修女が入ってきた。そして、ふたりに修道院長とコーヒーを飲まないかと聞いてきた。しかし実のところは、彼女ひとりしかいなかった。この平修女はずんぐりした体形で、いつもかぎ煙草を吸っている年配の女性だった。また、ひどく気難しかった。

「まったく！」と平修女は言い始めた。「聖S～に妙なならわしを持ち込むね！このコーヒーはひどい味だ。テレジーナ、あんたの兄さんは毎日ここに来るけどねえ。ラム酒なしのコーヒーなんて、わたしゃ、嫌いだよ。クロリンダ、あんたはね、言われたとおりにするんだよ。一つまりさ、明日テレジーナの兄さんが来たら、とりあえずは出迎えて次からは来ないように言わなきゃダメだよ」。

クロリンダの涙がコーヒーと交じり合った。ふたりが部屋に戻るや否や、クロリンダは「あの年寄り魔女め！」と言った。

「あの人がたら贈り物をしなきゃいけないように仕向けてるのね」。

「うーん、でもひとつぐらいはしなきゃいけないんじゃない。ジャコモに何を贈ってもらおうかしら。」—「ラム酒を届けてもらいましょ。あの人が、コーヒーのことで顔をしかめるのを見なかった？でもすごくケチだから、自分で買うこともしないのよ」。

急遽、テリーサの手から短い手紙がジャコモに渡り、奉納が必要だと伝えられた。そして翌日、ジャコモが準備万端でやって来た。近所の宿屋の給仕人を帯同して、ロムという銘柄のボトル6本を持ってきたのである。テリーサが呼ばれ、さらに修道院長に来てもらおうと、急いで頼みに行った。院長がやって来た。ジャコモは帽子を取った。

「院長様」とジャコモは言った。「冬場でございまして、わたくし、この季節にふさわしい贈り物を持参いたしました。—ラム酒を受け取っていただければ栄誉に存じます。」「そこまでしていただいてはご好意が過ぎますよ。」「い

えいえ、ご好意いうのは院長様からいただくものです。これらの供物をお納めいただくことで、わたくしは院長様から栄誉を授かります。お気に召すなら幸いです。」—そう言って、ジャコモはコルクの栓を抜く。テリーサは駆け足でグラスを持ってくると、彼はグラスになみなみとワインを注ぎ入れ、院長はそれを一気に飲み干した。

まさにその瞬間だった。クロリンダが部屋へ軽やかな足取りで飛び込んできた。クロリンダは努めて自然なそぶりで振る舞い、ジャコモに挨拶してその場を立ち去ろうとしたが、ジャコモが彼女を引き留めたので、皆で腰を下ろした。やがて、院長が夕食用のパンの支給に呼び出されると、3人の若者がその場に残された。

女性陣はもの問いたげな顔つきでジャコモの方を向いた。ジャコモの顔つきは暗かった。

「僕の提案は受け入れられなかったよ。君のご両親は、君をだれか他の人と結婚させようとしていて、その約束を破るわけにはいかないらしい」。

「それじゃあ、私が犠牲になるのね！」クロリンダは声を張り上げ、美しい眼を向けた。「君は同意するつもりかい？」責めるようにジャコモは言った。「私にどんな手段があるって言うの？だから逃避行のことを言ってるんでしょう」。(ジャコモの表情は沈んだ。)

「それに、難しいことだけど不可能じゃないわ」。

「どうやるんだ？」

「つまりね、私の部屋は院長室の隣にあるのよ。院長は甘いものに目がないじゃない。だから次の休日になったら、私がいくつかケーキをいくつか作って、その中に砂糖と少しばかりアヘンを入れておくの。そして鍵を盗んで蟬で型をとれば（大きいものを準備して）、簡単に鍵の複製ができるわよ」。

「あなた！兄を危険な計画に巻き込むつもり？」とテリーサは言った。

「僕の大事なクロリンダ、僕のいとしい友よ。」とジャコモは言った。

「君は世の中ってものを知らない。僕は君のためなら命だって犠牲にするよ。」

だけど、そんなことじゃあ、君は名誉を失い、僕は投獄されるだろう。さらに、君は山に囲まれたわびしい修道院に送られた挙句、ついには田舎者と結婚させられ、死ぬまでみじめな生活を送ることになる」。

「じゃあ、どうしたらいいの？」クロリンダは不服そうに言った。

「少し考えなきゃいけない。何かしなきゃ、何か手は打つべきだと思う。どうか、僕の心から離れずに、ご両親の申し出を拒否してくれ。そうしたら、僕は絶望しない。明日父に会いにシエナへ出発するよ」。

ジャコモはローマに住んでいるイングランド人の若い芸術家と親しくしていた。そこで、ジャコモはこの紳士に自分の恋人を任せ、重い気持ちを引きずって、短い日程でシエナに向かった。翌朝、ほとんど判読できない筆跡で5ページにわたって書かれた手紙がクロリンダのもとへ届けられた。われわれの友であるイングランド人は、ローマに一年いたのだが、修道院の内側に足を踏み入れたことは一度もなかった。そして聖S~の牢獄のような建物の前を通り、庭を取り囲んでそびえ立つ壁をその目でしかと見やり、あらゆる世代の、あらゆる地位の、そしてあらゆる性格の尼僧がそこにいることを想像した。まじめで慎み深い者たち、野心のある者たち、頑固一徹な者たち、おのれが立てた誓いを悔い改め、夜中に涙を流してわら布団を濡らし、十字架の前にしつけた大理石の上にひれ伏し、人間であることの許しを得ようと神に祈る者たち。そして、花嫁のように恐れおののきながらも、それほど希望に満ちているとは言えない修練女のことが思い浮かんだ。また、われわれが墓の彼方に楽園のあることを夢想するように、外の世界を夢に見る寄宿生たちのことを考えた。さらに、もの音が響き渡る廊下、彩色の施された窓、侵入を拒むような格子、いかにも修道院らしい中庭、菜園。そして草の茂った歩道や威厳のたたえた木々やその木陰をバールをかぶった人々が軽やかに行き交う—そんな施設の中でも最も清らかなものを、その紳士は心に描いていた。つまり、とその紳士は考えた。今自分は手も足も出ない状態にあるのだ、と。そしてこうも考えた。もし、ここでたじろかなければ、少なくとも手掛けている「エロイズの職業」と題した絵

画のヒントを、おそらく最良の形で手に入れられるはずだ、と。

紳士は表玄関を抜けて、ベルを鳴らした。おぼつかない足取りの老いた玄関番が扉の方へ向かった。彼が「テリーサ・トロメイ嬢をお願いします。」と面会許可を申し出ると、応接室へと案内された。部屋の天井はアーチ形で、床にはレンガが敷き詰められ、みずばらしい調度品に加え、冷たい西風が地面を白霜で覆っていたにも拘わらず、炉火はおろか暖炉さえなかった。数分すると、二人の友は軽やかな足取りで部屋に入り、ユースタが続いてやって来た。ユースタは編み物をする代わりに、木炭を詰めた火鉢を持ってきて、そこに自分のしなびれた手や霜やけで青くなった鼻をかざしていた。女性たちは自分たちの知らない男性を目にして幾分驚いた様子だったが、この男性は前に進み出て、自分はシニョール・マルコット・アレンといい、テリーサの兄の友人であると名乗った。そして妹に、このイングランド人を信用するようにと書かれた短信と合わせて小さな小包を渡した。

会話は活気づいた。どんな羞恥心も、クロリンダが自分の情熱を滔々と語るのを邪魔することはなかった。特に、申し開きをすることで湧き上がる強い思いを述べる段になるとなおさらだった。アレンの物腰は、すこぶる好感の持てるもので、柔らかな声音と表情豊かなまなざしが備わっていた。イタリアのご婦人方はイングランド式の慇懃な流儀に慣れていない。なぜならあの国では、あけっぴろげな恋愛をしているか、そうでなければ距離感のある冷淡さが男女間で続いているか、のいずれかだからである。アレンは様々なところで、憐憫の情を掻き立てられた。まず、クロリンダがこのような修道院に5年も閉じ込められているという話を聞かされ、さらに目にしたのはさびれた菜園だった。そして、身を切るような寒さを肌で感じ、その寒さをしのぐには火鉢しかない。アレンは空虚な廊下とむさ苦しい居室を一瞥し、このような境遇の犠牲者に、物腰の優美さや繊細な感受性を認めた。そして、そういったものが荒涼とした窮乏生活にはそぐわないと見て取ったのである。

その後、何度か訪問をするうちにアレンはこの修道院で人気者となった。ア

レンはまだ17歳だったが、その精神も高邁であった。アレンは友人たちの気を紛らわせ、ラムや砂糖菓子の贈り物を尼僧たちに配った。また、この中では一番器量の悪くない何人かに接吻をし、こっそりと修道院長を愚弄した。ジャコモが1年かけて成し遂げたのに比べると、彼はわずか1週間で世間から隔絶したこの場所で、いっそう自由に振舞えるだけの地位を確立したのだった。当初、アレンはクロリンダに同情を寄せていたが、今はそれ以上だった。彼はクロリンダを楽しませた。もしクロリンダがジャコモに会えないからと涙を流せば、アレンはタイミング良く何か話をして笑わせた。あるいは、尼僧たちがささいなことで威張り、そのことにクロリンダが愚痴をこぼしたなら、アレンは復讐の茶番劇の筋書きを提案して、クロリンダがそれを実行した。アレンがイングランド流の冗談やいたずらの流儀を披露するものだから、哀れなイタリア人たちはすっかり仰天してしまい、そういったものを経験したことがないがゆえに、まんまと引っかかってしまうのだった。彼らにはこういったいたずらの意味が全くわからなかったので、驚きと怒りのこもった大声がアーチ状の通路に響き渡った。その後、柔らかに言葉を掛けて、タイミング良く贈り物を渡してやることで、彼らを落ち着かせた。

しかしながら、このような太陽の輝きも長くは続かなかった。クロリンダは当初、以前よりも楽しく快活であった。自分の恋人がいないことを嘆こうにも、そうは行かない。アレンのおかげで、うきうきとした気分以外は、すべて心からなくなっていた。クロリンダはアレンの訪問時間をわくわくしながら待ちわび、アレンに会って掻き立てた浮かれた気持ちは彼が帰った後もずっと続いた。クロリンダの足取りは軽かった。辛気臭い居室の寒さも、気にならなくなった。なぜなら、そこには修道院長や尼僧たちを滑稽に描いた絵が飾ってあったからである。

院長や尼僧たちの横暴な言動は鳴りをひそめたか、報復されたかのいずれかであったが、悲しいことにジャコモは！忘却の彼方にあつた。クロリンダの手紙からは愛の炎が消え、彼女はそういった手紙を書くことも大儀になった。

ため息は微笑みへと変貌した—が、それも突如として消えてしまい、クロリンダは以前にも増して憂い、ふさぎこむようになった。テリーサを遠ざけ、自分の時間の大半を、菜園のまっすぐに伸びた道をひとり行き来して過ごすようになった。アレンが姿を見せないとやきもきした。アレンの訪問が伝えられると顔を赤らめ、アレンのそばに黙って腰を下ろした。気の利いた言葉がことごとくクロリンダの笑いを誘ったかと思えば、その笑いはすぐに涙でかき消された。クロリンダの愛情は、ふたりの間でお決まりになっていた親近感をもかき消してしまった。

アレンには守護聖人がなかった。マルコットという名の者は誰も列聖の名誉にあずかったことがなく、カタコンベで発見された骨にしても、いずれもアルプスの向こう側で使われる呼び名で洗礼を受けたこともなかった。「なんと、これはこそそそと隠れている悪だくみだね。いたずらという意味ではあるが。」—気まぐれという些細ないたずら、新たな恋の始まりとそれに伴う災難。アレンは彼女の変化に気づいていなかったが、ある朝のこと、二人きりの会話がやみ、彼の方から示したちょっとした気遣いにクロリンダの頬は赤く染まった。こんな告白をしても間に合うわよねという言葉、アレンは驚きと喜びの入り混じった気持ちで耳にした。そして、不在のジャコモに対する不実を封印するためにキスを交わしたのだった。ちょうどそのとき、テリーサとユースタが部屋に入って来た。

アレンはまだ17歳だった。この年齢の男は、女を生ける楽園とみなし、大胆にも自分たちがそれを享受できるなどとは考えない。このような男たちは、女を愛することはしても、愛されることは夢にも思わないのだ。彼らは追い求めても、見果てぬ空想の中、自己を求められる対象として思い描くことはしない。それゆえ、アレンの心が歓喜の念で鼓動し、その日は足取りも軽く、修道院をあとにする際に目を輝かせていたのは、若干驚くべきことであった。そして、彼が訪問する頻度はさらに高くなった。テリーサは体調を崩して部屋に閉じこもりがちになり、恋人たち（その聖なる呼び方をこのように使うと汚れて

しまうのだが)は、人目を忍んで一緒の時間を過ごした。クロリンダはすっかり逃避行をする気になり、アレンは不注意にもそれを育てしまった。

そんなある日、クロリンダはこう言った。「今夜この修道院を出て行くなら、壁の下まで迎えに来てくれる？」

「僕の愛しいクロリンダ、本気で言っているのか？」

「あら、本気なんかじゃないわよ！そんなこと無理だもの。だけど、2日か3日のうちには、私の立てた計画を実行できると思っているの。ほら、ここに、修道院の鍵を鋳型にとった蠟がここにあるでしょ。あなたには、これでもうひとつ鍵を作らなきゃね。シスターたちは、晩は熟睡しているはず。だから私たち、あなたの幸せの国に向け、朝になれば遠くまで行けているわよ。どうか恐れないうで。私の変装道具も準備してるから。―何もかもうまくいくわよ」。

「やっかいなことになったな！」

アレンは聖S～をあとにしながら考えた。そして、彼女から受け取った蠟の鋳型を、陽なたの壁にそっともたせかけ、散歩道へ歩を向けた。

「また、この壁の中に入れば面倒なことになる。美しい農作物の種を蒔きはしたが、それを刈り取るほど僕も向こう見ずじゃない。運命の手配通り、トロメイが戻って来たな。僕の間違ったやり方を咎めるだろう。願わくば、すべての修道院と女性たちが―」。

ちょうどそこで、トロメイがアレンに近づいてきて言葉を掛けた。ふたりはコロセウムの方へ連れ立って歩き、どうでもいいことを話題にした。廃墟の最も高いところにまで登って行くと、葉の生い茂る低木や良い香りを放つすみれ、ニオイアラセイトウに囲まれて腰を下ろした。そして、うら寂しい小道と踏みにじられたような古代ローマの大広場を見渡しながら、ジャコモは尋ねた。

「クロリンダが変わったことはなかったかい？」

アレンはおのれが絞首刑にでもなればいいと願ったが、その願いがまさに実現しようとしている時のような表情で、友の問いに対して簡単に答えた。それから彼は策を思案し、情熱的な顔つき、すなわち恋をしている者の表情を見せ

ないようにした—それは言葉にするよりも、もっと痛ましいものだったが。ジャコーモの望みは、ほぼ絶たれていた。彼の父親は頑として息子の言うことを聞かなかったのだ。これに加え、クロリンダの両親が娘のために選んだ婿候補がすでにローマに来てしていると知らされ、窮状に追い打ちをかけた。この話をしながらジャコーモは号泣し、もし彼女が今でも自分を愛してくれているなら、運命の相克のために自分は最後の手段に出ざるを得ないと断言した。最後にふたりは別れを告げ、翌日は聖S〜へ一緒に行こうと約束した。

しかし、アレンは約束を守らなかった。彼は行けなくなった言い訳をし、それゆえジャコーモひとりが向かうことになった。その晩、アレンはクロリンダから手紙を受けとった。クロリンダはアレンが来てくれなかったことを嘆いた。彼女はジャコーモに抱いている完全な嫌悪感をあらわに言い立て、おのれの過酷な運命を嘆き悲しみ、翌日は両親と過ごすので、翌々日に来て欲しいと嘆願していた。アレンは言われた日が来るまでの時間をチボリで過ごし、傷心の友に会うのを避け、指定された時刻になると修道院へ赴いた。するとテリーサとクロリンダはいっしょにいた。ふたりとも取り乱して腹を立てている様子だった。アレンが姿を見せるとテリーサは立ち上がり、罪を意識に苛まれたカップルを軽蔑の目で見やりながら応接室を出ていった。

クロリンダはわっと泣き出した。「おお、私の愛する人！」と彼女は大声を挙げた。「この前会ってから、ある出来事があって胸の張り裂けそうな思いをしたのよ。あの残酷なテリーサはしきりに私のことを非難するし、ジャコーモはだまって悲嘆にくれた顔をするもんだから、私、よけいに厳しく非難されているような気になって。私、悪くなんかないわ。ただ、私の心が、思い通りにできる範疇を超えちゃったのよ。この圧倒するような感情は、理性の努力を物ともしなかった。それに望みなんて持たず、情熱的に愛しただけなの。見返りなんて期待しなかったと言ってもいいほどにね—それだけのことよ」。それから、前日彼女が両親のところに行ったら、娘を嫁にやろうとしている人に引き合わされたという。「はじめのうち」とクロリンダは言葉を継いだ。「どんな計

画が進められているのか知らなくて、気にも留めずその人と顔を合わせたの。ほどなく母が私を脇に呼んだわ。母の言葉は叱責の嵐で始まった。お前の考えは、すべてお見通しよと言ってね。で、ジャコーモに宛てに書いた私の手紙を見せられたの。あのいかさま院長野郎が、手紙を盗み見してたのよ。最後に私は、母が紹介した名士との結婚にすぐ同意するように言い渡されたわ。

『あなたに無理強いするわけじゃないけれどもね』と母は言った。『だからこそ、このことについて言い触らすのはご注意ください。あなたの振る舞いによっては、一番強力な措置を講じねばならないことになるからね。この縁組みはあらゆる点であなたにふさわしいものだと思うけれど、それを拒否するなら、ベネトにあるカルトゥジオ女子修道院へ送ることになりますよ。覚悟なさい。あそこで修道女としての生活をまっとうしないなら、あなたを厳しく監視することになるだろうし、企みやら手紙やら恋人なんてものは、もう使えませんからね』。

残酷な母は私に返事もさせずに客間へ引き戻したの。そこに来ていた名士はロマーニという名で、そばに來たかと思うと、頃合いを見計らって、両親の取り決めに同意するかどうかを尋ねてきたのよ。何て言えばよかったの？ 私がしぶしぶ従うと、事は片付いたと両親は考えたわ。その人の邸宅はスポレート付近にあって、私を迎え入れる準備をしにそちらへ向かったわ。書類はもう作成中なのよ。私は自分の棲む鳥かごを替えて、一生涯、みじめな生活を送る日が、すぐにやって来る。あなただけよ、アレン。あなたは寛大で勇気あるイングランド男で、私を救えるのよ。ここから連れ出して。自由と愛のもとへ連れ出して。あんな知りもしない花婿の犠牲にはならないようにしてほしいの。あの人のことなんかほとんど知らないし、考えただけでも心は絶望感でいっぱいになってしまう」。アレンは精一杯の返事をして、本心からの悲しみを表したが、慰めの表情は小出しにした。無情な夕食の鐘が鳴り、ふたりが別れたのは、ちょうどアレンが結論を返したときだった。

その晩、アレンはクロリンダから短い手紙を受け取った。「結婚への恐怖心

は」とクロリンダは書いていた。「その日が近付くにつれ高まっていきます。まさに今日、耳にした話では、両親はすでに嫁入り道具をローマに渡していて、それを受けて彼は、私の宝石やドレスを買おうとしているそうです。こうやって私の運命が封じ込まれようとしています。ローマから追放され、友人たちとも会えなくなるでしょう。知らない人と暮らしていくのです—みじめなことにちがいません。ジャコモは、これよりもましです。ですが、彼との結婚はできず、あなただって、助けてという私の申し出を拒んだ。愛を伝えた相手の自由を守ってもくれないのだから、せめて私が立てた計画だけでも聞いてほしいの。何年前か前、私はある人から求愛されました。その人は当時、私の心をつかみ、その人のことを私は今でも優しい気持ちで考えています。私の結婚持参金の少なさがもとで、その人のお父様が縁談をお取消しになりました。このお父様はもう亡くなられています。この紳士のもとへ行くのです—この人が今でも愛してくれているかを確かめましょう。その人と結婚するなら、自分の知り抜いている美点を備えた人といっしょにいられることになります—ローマに住むことになるでしょうし、残酷な運命を緩和してくれるものが少しはあるはずです。せめて明日、あなたは修道院に来て、みじめな友人をなぐさめる努力だけはしてください」。

ご想像に難くないことだが、アレンはかつての恋人クロリンダのもとへ、望まれたままに訪問をしなかった。おそらく彼女もそのことを予想していたのだろう。夜になって、彼女はアレンに宛て手紙を書いた。それは長く筆の冴えたものだった。そこにしたためられた言葉からは、情熱と愛に満ちあふれた思いが読み取れた。それはアレンをごく普通の友人とし、どうか事をすみやかに実行してほしいと迫るものであった。しかし、この手紙は送付途中で取り上げられ、クロリンダの両親のもとへ届けられた。翌日、アレンは失意の手紙を受け取った。それはアレンに修道院へ来ようとは思わないでと嘆願するものだった。「なんてことかしら！」と彼女は書いていた。「私は本当にみじめです！なんて運命！私は苦しみ、他の人たちには大いなる悲嘆を与える存在となっていま

す。おお、天よ！私は死んだ方が良いのです。そうすれば嘆くのをやめ、少なくとも、他の人たちに不幸をもたらすこともないでしょう。私は皆から憎まれているし、自分でさえも一おお、私の無比の友人よ！心の天使！あなたにも不幸の種となることがあるのかしら？ジャコモに会ってみて、愛する友人。そして私がどれほど深い哀れみを彼に抱いているか、伝えてちょうだい。ただ、彼には、これ以上の深追いをやめるように、私に代わって勧めてほしいの。彼なら、私が両親に従うのを許してくれるに違いないし、彼とのことは両親も絶対に承諾しないだろうから。私が今考えていることはただひとつ、この牢獄から抜け出すことだけよ」。

手紙が一通、また一通と送られて来た。アレンに対して、どうか修道院へは来ないと、今まで以上に強く嘆願するものだった。こうして一か月近くが過ぎたある日の早朝、アレンは面喰らった。聖S～修道院長が彼のもとに訪ねてきたからである。この老婦人は、まさに問題が山積みといった様子であった。贈呈されたロゾリオを飲み、かぎ煙草を吸い、自分の生活費も切り詰めていたのだ。院長は哀れなクロリンダとの間に生じた問題を話して聞かせ、ジャコモを激しく非難した。長々と続いた話の中で、院長はおのれの賢明さを誇り、クロリンダの両親が見せた細やかな愛情を称え、アレンを除き、若い殿方が修道院に足を踏み入れ、クロリンダと自由な交際をしてきたことについては、自分が常に適切に対処してきた次第を語った。ただアレンの場合、特にその礼儀正しさと周知のとりの誠実さが認められたため、規律を緩めることにしたのだとも述べた。そして、都合が良い折に、修道院を訪ねるよう院長はアレンを誘った。こうして話を締めくくると、院長はいとまごいをした。

アレンは大いに当惑した。聖S～へ行きたいとは思わなかった。もうクロリンダには会わない方がいいとわかっていたからだ。そこで一切外出をしないでおうと決意し、腰を下ろしてクロリンダの美しさや愛情、気取りのなさを思い浮かべた。その挙句、それらの思いを振り払おうとやはり出かけることにした。散歩道を足早に歩き、気が付くと修道院の扉の前にいた。少しためらった

後、やはり身体を動かし、表玄関に足を踏み入れた一呼び鈴に手が伸びたところで扉が開き、中からジャコモが出てきた。アレンの姿に気が付くと、彼はその腕の中に飛び込んできて涙の嵐にくれた。この序幕に、我らがイギリス人は仰天してしまっただけで、その結論部分はすぐに聞かされることになった。クロリンダは前日にローマニと結婚し、その晩のうちにスポレートへ向けローマを後にしたというのである。

このことを耳にして、アレンはたちまち我に返った。自分が危うく犯すところだった愚行を思うとその身が震えた。まさに高い崖っぷちから足を踏み外しそうになったところへ、友好的な手が差し伸べられ、そのおかげで踏みとどまれたような気分だった。ふたりは修道院の扉に背を向けた。「だけどねえ」とアレンは歩みを止めずに言った。「君の話は確かなのかい？昨日、院長が僕のところに来て、聖S～に来ないかと誘ってきたんだ。クロリンダはもういないのに、なぜあの人はあんなことを言ったんだろう？この謎を突き止めにいきたい気もしなくはないが」。

「ああ、是非とも調べに行つてこいよ。」とジャコモは棘のある答え方をした。「君は歓迎されるだろうね。砂糖菓子ポケットいっぱいにしていけよ。例の老婦人にロズリオを渡して、おとなしい尼僧たちにキスをしてやればいいさ。とは言え、一番若手の尼僧でも、額を巻いているリボンの下に60年の重みを抱えているけどね。彼女らからすれば君の陽気さが恋しいんだよ。それに、クロリンダがいなくなった今、価値ある獲物を確保しておくための、新たな情報網を張ろうとしているだろうけど、そんなのは誰も知らないんだ。確かに、君はイングランド人だし、ローマカトリックから見れば異端者だ。だけど、言葉はなまりのないトスカナ語にすれば、気づぶがいい。それにこう言っちゃ悪いが、君は毎週金曜日に聖体拝領するのを躊躇わないのと同様、あそこの聖域を冒瀆するのを躊躇わないような良心の持ち主だ。ぜひとも行ってやって、あそこの天女たちに囲まれながら、おのれの幸運を最大限に活用するがいいよ」。

「それよりも、早馬でスポレートへ向かったほうがいいんじゃないか、わが

友ジャコモ君。いや、どちらもないな—無意味だし、心痛のもとになる。僕は『エロイーズの職業』を描きたくなかったから、もう行くよ」。

* 翻訳の底本としては以下の参考文献に記載の第一次文献を用いた。なお、作品執筆の背景についても同様に以下の文献を参考にした。

Bibliography

- Shelley, Mary. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. Ed. Betty T. Bennett. Vol. 1. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- . *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings*. Ed. Charles E. Robinson. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976.
- . "Notes on Poems Written in 1820" *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Ed. Pamela Clemit. Vol. 2. London: Routledge, 1996. 315-18.